

京産大経営学部と私 —— 忘れ得ぬ交流の日々 ——



神戸学院大学名誉教授
経営学博士(神戸大学) 戸田博之

私が京都産業大学で教鞭をとったのは、1967年（昭和42年）から1985年（昭和60年）の18年間、そのうち経営学部長を勤めたのは1975年（昭和50年）から1977年（昭和52年）の2年間であった。経営学部は外国語学部と法学部とともに1967年に新設され、初代学部長は村本福松先生、2代目学部長は石田興平先生、3代目は斎藤雅夫先生、そして私は4代目であった。当時私は弱冠41才。突然の指名に総長室で緊張気味であった私を優しく激励してくださったのは小堀憲副総長であった。ちなみに先生は、元京都府立大学学長で著名な数学者であられた。学問領域の違いを超えて、私は小堀先生のお人柄と深いご見識にいつも強く心惹かれていた。なお、私の後任は西村民之助先生であったが、先生はカーネギーメロン大学井尻雄士教授（日本人として初めての、アメリカ会計学会、A.A.A.会長）の岳父であり、西村先生とのご縁によって、私たちは今年1月に逝去されるまで井尻先生ご夫妻とは長年ご厚誼をいただいた。

周知のように、京都産業大学は「産学協同」を理念として設立されたが、その当時、国際性豊かな大学というイメージづくりにも熱心で、海外の著名文化人の招聘に注力していた。具体的には、1967年（昭和42年）には「歴史の研究」で有名な歴史学者トインビー（A.J. Toynbee）、1968年（昭和43年）には未来学者として著名であったハーマン・カーン（Herman Kahn）、そして1971年（昭和46年）には、のちにノーベル記念経済学賞を受けられたサミュエルソン（P.A. Samuelson）である。これらが京都産業大学の知名度を高めたのはもちろんだが、同時に、私だけでなく学内の若手研究者たちの意欲をおおいに盛り上げた。なかでも、トインビーの京都訪問・講演の実現に尽力されたのは、世界問題研究所所長の若泉敬教授で、先生は私にとっていわば畏兄的存在であった。私たち夫婦は、ご令室（ひなを様）もまじえて親しくさせていただいたが、先生が国家的大事業である沖縄返還問題に深くかかわっておられたことは、微塵も窺うことはできなかった。「他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス（他に策がなかったことをどうか信じてほしい）」あまりにも有名なご著書（1994年）のこの題名は、かつて陸奥宗光（むつむねみつ）が三国干渉の経緯について記述した「蹇蹇録」（けんけんろく、1929年）のくだりを「あえて自らの心境として、・・・題名に借用」（原文のまま）

されたものである。この13字の題名がもつ深い意味は、あの国士のような先生のご風貌とともに、今なお私の心に深く深く刻みつけられている。

ところで私は、海上自衛隊・第4術校の開校15年記念誌（1990年10月発行）に寄稿し、冒頭次のように記述している（一部加筆訂正）。「1976年（昭和51年）9月1日、まだ残暑の日ざし厳しい西舞鶴駅に私は降り立っていた。正直いって、私には僻地（？）を生まれて初めて訪れた戸惑いに加えて、その前日に海外研修から帰国したばかりの時差ボケが残っていた。それを直ぐに吹っ飛ばしてくれたのは、純白制服姿も凛々しい森貞正勝3等海佐（当時）のこの上なくこやかな笑顔であった。予想もしなかった挙手をもって丁重に迎えられた私は、思わずその迫力におされて、お辞儀とも挙手ともつかないぶざまな答礼をしてしまった。……」しかし実は、このときこそが（舞鶴）海上自衛隊第4術科学校と私、いや、京産大経営学部との出会いの瞬間なのである。

その数か月前、私は、荒木俊馬総長に「最善を尽くしてお手伝いするように」と直々に指示されていた。ご存知のように、荒木総長は世界的に有名な天文学者であるばかりか、類い稀な愛国者でもあられた。私は、後藤文彦助教授（当時）とともに、講師陣の編成にあたった。矢野先生（故人）には原価計算論と経営分析、原先生には価格論を快く引き受けていただいた。後藤先生は簿記論、私は財務諸表論と、監査論のほか原価計算と経営分析を担当したが、のちにマーケティング論の市川貢講師（当時）にも加わっていただいたことで、当時の経営学部としてはいわば全面的なバックアップ体制ができあがった。今では、私のゼミ出身の毛利隆志氏（公認会計士、のちに経営学部特任教授）に監査論を、同じく田端哲夫氏（現東海学園大学教授）に経営分析を担当してもらっている。このようにして、第4術科学校を舞台としてわが経営学部の先生方と学問の輪が年々広がっていることに私はおおいなる喜びと誇りを感じている。

実際に経理補給幹部課程の講義に臨んでみると、受講生の年齢層が自分とあまりかわらないことに最初は戸惑ったが、それも次第に気にならなくなっていった。少数ながら懸命に聴きいてくれる経理補給幹部学生諸君の真摯な学習態度に惹かれたからであろう。しかし、なかには簿記のボの字も知らない全くの門外漢もいたので、簿記会計といういわば狭い専門領域に留まらず、できるかぎり問題を社会経済あるいは企業経営と関わらせて解説し、ときには関連のトピックスを交えながら講義を進めることにした。逆にそのことは、私自身にとってもおおいに勉強になった。なお昨年までは、学習効果を試すために、受講生全員が日商簿記検定試験（2級）にチャレンジするのが習わしとなっていた。そのほか、ほぼ毎年、選抜された幹部自衛官は本学大学院研究科に留学し、これまで既に6名の経済学修士と6名の経営学修士の学位取得者が誕生していることはなによりも特筆すべきであり、これこそがいわば進化した「産学協同」いうならば「社会協同」ではないかと私は考えている。

1978年（昭和53年）、荒木俊馬総長が急逝され、後継者と目されていた小堀憲副総長も退職されるに及んで大学は大きく変容し、多くの優れた学究がキャンパスを去っていった。しかし、第4術科学校と経営学部の関係はますます親密さを加え、1979年（昭和54年）には第3代坂本校長はわざ

わざ上賀茂キャンパスを表敬訪問されるほどであった。また、軟式野球試合も相互のグラウンドで行われ、交歓の度合いを重ねていった。ちなみに、これまで42年間の通算成績は第4術科学校の22勝20敗と聞いている。なお、開校10周年の式典に私は招かれた。その記念にいただいた文鎮には「不進則退」（進まざるは即ち退くことなり）と刻されている。宮津ご出身の前尾繁三郎元衆議院議長によるものだが、自身の若き日の生きざまと思いを合わせて、この4文字は今でも大変気に入っている。もうひとつ思い出の記念写真がある。それは、1998年に飛来したテポドンを最初に補捉したイージス艦みょうこう（妙高）に、私の長年の親友佐々淳行氏（初代内閣安全保障室長）とともに乗艦体験をさせていただいた時のものである。この写真は、上の文鎮とともに、いつまでも私の書斎を飾ってくれるであろう。

当時の研究環境は必ずしも十全なものではなかったが、私なりに研究成果を上げることができた。たとえば、私のライフワークのひとつワルプ（E. Walb, 1880-1946）研究は、「ワルプ・損益計算論」（上巻1982年・下巻1984年、千倉書房）の出版をもって完成できた。また、1984年秋には、ヨーロッパ会計学界の泰斗チューリヒ大学ケーファー（K. Käfer, 1999年没）教授にご来学いただいたことも、いまや懐かしい思い出である。1985年（昭和60年）には、設立委員のひとりとして日本簿記学会を立ち上げた。時を経て、2010年（平成22年）8月29日、日本簿記学会第26回全国大会が本学部を準備校として開催され、私は記念講演（題名：わたくしのカメラリストイク研究）を依頼されたことは、望外の幸せであった。加えて最近、本学部の橋本武久教授が日本簿記学会の副会長に就任されたのも嬉しいニュースである。

ゼミの卒業生は約300名を超える。そのうち、経営学部ではじめて公認会計士二次試験に合格した毛利氏（上掲）のほか、数十名の税理士や国税専門官が第一線で活躍している。実は嬉しいことに、ここ40年間——京産大退職後ですら——私の誕生祝賀会を毎年催してくれており、この会には後年奉職した他の2大学のゼミ生も加わってくれている。ゼミの「教え子」といってもゼミ1期生はすでに古希を迎えており、話題はいまや健康と孫の話ばかりである。かつては「人生は一期一会、人のご縁を大切に」を口癖にしていた私であるが、最近では——そこは会計学者らしく——「FIFO（先入先出法）こそ人生の順法、LIFO（後入先出法）は人生の逆法だよ」（転じて、私より先に逝くなよという意味）と論ずことにしている。

私は今年で満84才。米寿（数え88才）を迎えるのもそれほど遠くないであろう。想えば、大阪府立大学経済学部を振り出しに、福山大学経済学部まで約47年の教員生活であったが、京産大経営学部での在職期間はその半分にも満たない。しかしながら、在職中に得られた内外の諸先生方ならびに教え子たちとの交流の日々は、私のこれまでの人生の歩みにおいておおいなる糧となっている。ここに、改めて心から感謝申し上げたい。